
紅き空

雨空*。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅き空

【著者名】

雨空*。

【あらすじ】

天人と人間の間に
生まれた主人公

雨音

男として
生きると選んだ

真選組に入隊し

女であること

バケモノであることを

隠しながら

過ごしていくにつれ

土方に惹かれていく…

想つてはいけない
だって私は

バケモノだから…

プロローグ*。

好きです

貴方が

大好きです

でも

人でない私には

貴方を

想ひつゝとある

ユルサレマセンカ?

汚れた
汚れた
漆黒の血

君が知つたら
なんて思うのだろうつ

気持ちが悪い - と

近寄るな
と

サゲスミマスカ?

人のようで人でない

獣のようで獣でない

そう

私はただの

バ

ケ

モ
ノ

銀魂 二次創作

土方十四郎寄り

検索ワード

銀魂／真選組／土方／沖田／近藤／山崎
万事屋／銀時／攘夷／桂／高杉

甘く切ない
物語です

死ネタはございません

描写するついで

裏夢のようになるかもしません

プロローグ*。（後書き）

誤字脱字

激しいと想いますが
よろしくおねがいします！

出でい*。

どんよりと曇つた
江戸の空

私はヒトツ
歩いていた

追っ手から逃れ
たどり着いた江戸

武州の田舎とは違う
活氣があり
賑やかな場所

「はあ……」

深くため息をついた

これがひびきまづ

それだけが
頭から離れなくて

ふらふらした

足取りのまま前に進んだ

ドンッ

何かにぶつかつた

「オイでめえ　どこ見て歩いてやがる」

パンチパー…否

アフロにグラサンの男に
ぶつかってしまったようだ

「申し訳ない」

面倒なことになりたくない一心で
いつた言葉

「それで許されたら警察いらねーんだ

」

「オウ…確かにこりねえな

アフロの声が
背後から聞こえた

凄味のある低い声音に搔き消された

アフロの顔からは
血の気が引き
青ざめていく

「す、すすすすすしまつせ————んんんん

謝罪をしながら
アフロは逃亡した

「嬢ちゃん ああゆつのこま
氣をつけろよ」

煙草の香りが鼻につく
私を心配しているようだ
助けてもらわなくとも
あんなん余裕だつたのにさ

振り返りずに悪態をついた

「て…てめえなんだその態度は」

そういうながら

私の視界に入ってきた男

黒いジャケット
黒いスラックス

手には煙草
腰には刀

ああ

知ってる

真選組だ…

出でい*。武

俯いていた顔を上げてみた

整った顔立ち

眉根を寄せ

私を睨む

私も睨み返してみた

「幕府の狗が

私に関わるなつ」

「てめえ

お上にたてつくなんぞ
いい度胸じゃねーか

開ききつた瞳孔が
更に開いた気がした

これはまづい

逃げよう

「度胸なんてないよ
思つた事をただ言ってみたんだ」

そういう残し

踵を返したと同時に

左腕を捉まれた

少し前のめりになり
着物の袖から露わになつた腕には
無数の切り傷

ケロイド化した傷跡

「……離せ……」

俯いたまま放つた言葉

「す、すまねえ……」

啞然とした顔？

哀れむ顔？

軽蔑するのか？

あんたも

そう胸に抱きながら

一瞥した彼の表情は

怒りに満ちていた

何故

何故怒っているの？

汚いから？

命を粗末にしてくるから？

「お前、 その腕」

男は雨音を睨んだ

「てめえでやつたのか？」

雨音は男に背を向けたまま答えた

「知らない、
貴方には関係ない
何で怒つているのよ」

「腹が立つんだよ」

煙草を持つ手に力が入る

「汚いから?
命を粗末にしているから?」

「ちげえよ

んなこたあ微塵も思つちやいねえ」

だがな

「やつてるのを知つてしまつた
これからも、お前はやるだうう
それを…
知つていながら止められない事に
腹が立つんだ…」

「…ツ…！…？」

悔しそうに

並びの良い綺麗な歯を

食いしばる男

何故…

何故そんなことを
思つてくれるの?

「そ、そんなこと
構わない…」

ありがとう

必死に走った
泣きそうになつた
歯を食いしばつた

後ろから

ごめん

そう聞こえた

何故 彼は謝るのだろう
何故 彼は怒るのだろう

全てが全てが
不思議だった

：

でも

全てが全て

暖かかった

：

縁*。（前書き）

嗚呼、

じんなりんじん

君は臣たのね

おかげで
ありがとうございます

ありがとうございます

「はあ、はあ」

どれだけ走つただろ、う

歌舞伎町まできてしまつたよ、うだ

「うう…

これが、ううされば、

頭を抱え

その場にしゃがみ込んだ

頭の中は

先ほどの男で、いっぴい

黒い服
…

あ、

「真選組で働く…」

とつぞに思いついたこと
身を隠すため
男として
大好きな刀を振るえること

それしかない…！

お金はあるし

刀はないけど

袴さえ調達できれば
問題ないはずだわ

立ち上がり周りを見渡す

目に入ったのは

万事屋銀ちゃん

「万事屋って確か
なんでも屋…よね」

顎に手を当てて

思考回路を張り巡らせる

よしーーー!

走つて階段を駆け上がる

ダダダダダダダダダダ

ゴンゴン

古い戸を叩いた

「うめぐだれアアアアアいーーー。」

ムカツ

二二二

「」と顔面にとび蹴りをくらつた雨音

「い、痛いじゃないの…」

鼻を押さえながら

長身の銀髪の男が立っていた

「うぬやーんだよお前つ
闇にへるつての... ハア... うん。」

銀髪の顔が汗ばんできた

「だ、だつたらなによ

大体アンタ！！客になんて態度なのよ」

頬を膨らませ

涙ぐんできた目で更に睨む

「新ハイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

お答校た

新ハと呼ばれた
冴えないメガネが
中から出てきた

「あ、ここがやめたい！」

「ハモ 汗してやがあがんでくだら」
「ハハハ」と笑うと

中へ案内してくれた

感じのいい子

「お…お邪魔します//」

ソファーが一つ向かい合い
間にテーブルのあるシンプルな部屋

糖分 と書かれた額縁

「さあお嬢さん
ご用件は？」

銀髪は悪びれるじるか
何事もなかつたかのように
話し始めた

「と、とりあえず
ティッシュを・・・」

鼻血が出てきた鼻を抑えながら
新八君を見た

「あつ！ハイ！大丈夫ですか？
何故 鼻血が？」
苦笑交じりに問いかけながら
箱ごとティッシュをくれた

「セーの銀ぱ…白髪にやられたのよ

「なんでそこ言い直したのかな！？
お嬢さん…銀髪でいいと思うんだけど
ねぇ！…聞いてる！？」

銀髪、呑田髪がほえる

「ちょっと銀さん
女の子に手をあげるなんて
見損ないましたよ」

新八君は

蔑んだ目で銀さんといつ男を見た

「あ、いや違うんだって
銀さん
あのーほらアレだよ
うん、アレ！
そつそつアレー！」

「無視しましよう
で、なにかお困りですか？」

新八君は私に向き直った

「袴がほしいの
あとは結い紐」

「何故またそんなもの…
女性なら着物とか
髪飾りとか…」

訝しげに私を見る

ビハビハ…

白髪の田つきがかわる

「事情があるの
男装したいの
お願ひ新ハ君！！
袴を買つてきて！！
お金ならたくさんあるのー」

切羽詰つた顔をしていたのだろう
押しに負け
理由を聞かずには
買いにいってくれた

部屋に残されたのは
白髪と私

「お嬢さん
名前は？」

先に口を開いたのは白髪だった

「雨音…

原田雨音です

貴方は？」

「俺は坂田銀時
銀ちゃんつてのが俺だ」

少し得意気な顔をした

「坂田さん

今回をお願いしますね」

「おう任せな
しかしまあ男装とはな
あんまりあぶねーことに
首突つ込むんじゃねえぞ？」

「あはは

大丈夫ですよ

ありがと「ひざこますつー！」

私は

ぎこちない笑顔で礼を言った

「笑えるじゃねえか
ぎこちないねーけどーー」

ボソッ

何か呟いたみたいだつたが
聞こえなかつた

しばらくして

新八君が

袴と結い紐を持って帰ってきた

袴代と紐代

依頼料金を適当に払つた

「こりで着替えをさせてもらひ

着物も預かつてくれるといつてくれた

「ありがとうございますーーー

絶対取りにきますから」

銀時は兩音を見ると

「へーん

「どこからどうみても女だ」

「つづつ…

新八君も同意見のようだ

「ええええ…

サラシもまいたし
ばれない筈なのに…

「で、でも仕方ないんです！
お世話になりました」

長こりと同じ人と

話した事がなかつたので
いたたまれなくなり
その場を逃げるように後にした

ああああああああああ

私はなんて無礼者なの…
ごめんなさい

銀時さん
新八君

かならず

お礼しますから

許してください

日が暮れてきた
歌舞伎町を後にし

真選組の屯所を探す為
足を速めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0769p/>

紅き空

2010年11月24日22時00分発行